第498号 昭和61年12月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

1986年（昭和61年）
12月号（No. 498）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

エベレスト・南北からの交差縦走 大塚博美……(1)
海外の山 ……(3)
「未亡人の涙」
九州山の集い—'86 みやざき 大谷 優……(3)
近代絵画にみる 日本の山・名作展……(4)
林野行政は見直しの時期に 関塚貞亨……(6)
越後支部結成40周年 記念晩餐会と貉ガ森山……(6)
自然保護の標語について 自然保護委員会…(8)
山陰支部だより ……(8)
追悼 木原均先生の憶いで 中尾佐助……(8)
会務報告・ルーム日誌・会員移動 …(9)
図書受入報告 図書委員会……(9),(10)
会員住所・住居表示変更 ……(10)
復活・新入会員 ……(11)
お知らせ ……(11)
「集会山行」「講演会（大気の発光現象について）」「図書委員会より」

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

●年末年始の休み
12月29日（月）～1月5日（月）

お知らせ電話 234六六五九

'88春 エベレスト・南北からの交差縦走

——日・中・ネ三国合同登山について——

実行委員長　大塚博美

中国の提案による、この標題の計画が、幾多の曲折と、戸惑いの末、JACがこれを受け入れてやらざるを得まい、と、半ば屈折した思いを抱きながら承認したのは、本年五月十四日の理事会であった。

この経緯の詳細を述べることは主旨に反するので避けるとし、ここでは、会員諸兄姉にとって、必要と思われる事項をピックアップしてお知らせすることにしたい。

発端

本会の東海支部は中国登山協会のこの提案を受け、ネパールと折衝し、三国合同登山の骨格を作り上げた。

中国・ネパール共に国レベルの事業としてとり上げる形となったため、東海支部ではこれを本部主催に移行したいと申し入れた（本年一月）。

時を同じくして、読売新聞社側からは、社長名をもって、本会宛に、この計画に多大の関心を持ち、全面的な支援を行ない、共催したい旨の申し入れがあった。

それから約三ヶ月、東海支部がアレンジしたこの計画内容について種々話を聞き、情報収集し、検討したが、判断するにはその材料が少なく且つ不鮮明で、決断にはなかなか至らなかった。ただ読売新聞・日本テレビの強力なスポンサーが一丸となって全面的にバックアップするという姿勢が、いち早く表明されたことは、極めて重要な事実であった。執行部が一番戸惑ったのは、「持込みの計画に、スポンサーがついて来た。」という、JACにとって、初めての事態であった。

ヒマラヤを初めとする海外登山は、まず山に行きたいという情熱・夢があり、そこに創造性が生れ、計画が誕生していく。資金はすべての隊にとって悩みの種である。常に手づくり、手弁当が登山界の常道であったことを考えると、今回の状況は、まるで異質であることが解る。

更に加えて、この計画のルートが北方・中国側からは北東稜、南方・ネパール側からは東南稜をそれぞれ登って、頂上で交差トラバースして反対側に下山する、ということであり、一語で云えば、「新味がない」ことである。オーソドックスなルート、余りにも知りすぎたルート、されどエベレスト、というところである。

世界の登山界の現状は、無酸素登山、アルパインスタイル、軽量化登山の傾向である。今回のような重厚な極地法登山は、まさに時代に逆行するものだという視点からとらえると、時代錯誤の面が見えるのは止むを得ない。

メインの交差縦走隊に、小さなバリエーション登はんのパーティをつけて見たらどうか、という真剣な意見もあったが、頂上での生のTV宇宙中継の実施のことも併せ考えると、オプションのサブプランは一応除外せざるを得ない状況である。

煮え切らない屈折した気持とはこんなことであろうか、グズグズしている時、中国登山協会会長史占春氏一行が、この計画推進のために来日し、関係の有力国会議員に働きかけた。四月十六日、JACは、史会長ら一行を迎え、夕食会の宴を持った。

席上史会長は挨拶の中で「この三国の友好合同登山の実施について、日本側の団体として、JACは、これを行なう義務と責任がある…」と述べた。CMA（中国登山協会）の考え方はまことに明快で迫力があり、JACへの熱烈なプロポーズでもあった。

日本を代表する責任ある団体として、厚い信頼を本会に寄せられていることを、こう臆面もなく言われて見ると、なる程とうなずいてしまう。チョモランマを登らせてもらったこと、その登山の実績と、実力を十分に承知の上でのことであろう。

煮え切らない、モヤモヤしたふん囲気は、仕方ない、と半ば飽らめ、腹を決める方向へと傾いた。

決定—四月の理事・評議員会

理事会は中国の提案を受け入れ、この取扱いを三役（会長、両副会長）に一任することを了承した。

受け入れの主たる理由は、中国が西側諸国に登山開放するに当り、チョモランマの登山許可第一号を日本に発給してくれた。JACはその実施団体として北東稜・北壁の二ルートからの登頂に成功した。しかも北壁は初登頂であ

る。登山史に輝かしい一頁を飾る栄誉を得ることが出来たが、それも、これも、第一号の登山許可が得られたればこそである。まことに深い恩義と云わざるを得ない。

今度は、CMAから熱烈な要望もあり、過去の経緯を考え併せ、国際信義を尊重し、今後のアジア近隣諸国との交流を重視し、異論はなかった。

そして、この計画を通じ会の活性化を計ろうと言うことである。

登山計画概要

理事会の決定を中国に伝えると同時に、東海支部への返事、読売新聞社の共催申し入れに対し、受諾の返事（五月十五日）をしてから現在まで約六ヶ月、略、その概要が出来上ってきた。

これには五回に亘る三国間の折衝が持たれ、各々のプランのすり合せ、意見交換があった。（七月、北京、日・中。八月、東京、日・中・ネ。九月、カトマンズ、日・中・ネ。十月、香港、日・ネ。十二月、北京、日・中）

分担業務・予算を含め、最終決定には至っていないが、土俵は出来上ったと云ってよい。

次は若いクライマー達が、サガルマタ／チョモランマを舞台に、それぞれ国情、伝統文化、風俗習慣、言葉の違いを背景にしながら、目的達成に向って協力し合うときである。

伝統的なルートと云っても、八八四八㍍の自然の猛威は人力の到底及ぶところではない。南側に比べ、北側ルートはより多くの未知の部分を含んでいる。

安全・確実を第一に、縦走隊を成功させるには、八五〇〇㍍に強固なファイナル・キャンプの確保が必要だし、頂上からの宇宙中継の安定度を百％高めるには、頂上にテントを建てる余裕がなくては、これはおぼつかない。

われわれは、三国合同の原則について、中国側とも率直な意見の交換を行なった。

三ヶ国の隊員で編成する登頂隊が、南北それぞれから縦走するという目的に際し、天候、隊員のコンディションによっては、必ずしもこの原則は守られないこと。極地法登山による場合、成功は個人の栄誉でなく、隊のものであること。従って、三ヶ国の隊員が揃わない縦走隊であっても、これは、合同登山隊の成功であること。多くの下積みの隊員の協力と押し上げによってなされたこと。以上を強調して了承して貰った。

八五〇〇㍍での生活と行動は、言葉や観念の世界ではない。身・心、共に余裕のある者だけが正しく評価されるところである。

JACの組織

十一月の理事会で次の組織と責任者が承認された

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

馴化され、鍛えられた身体と心の若いクライマーには、多くの期待がかけられることになろう。

＊

一、隊の名称　日・中・ネーサガルマタ／チョモランマ峰友好登山隊

一、目的　三国が協力し、友好の実を結集してサガルマタ／チョモランマを南北からそれぞれ登頂、交差縦走する。

TVは、山頂から生の宇宙中継によって、この模様を世界に向けて放映する。

一、期日　一九八八年、春

一、ルート　中国側＝北東稜を経て頂上からネパール側へ。ネパール側＝東南稜を経て頂上から中国側へ

一、隊の構成

（一）総指揮部　在北京

○総顧問　李夢華スポーツ大臣

〃　桜内義雄スポーツ議員連盟会長

〃　R・N・パンディ観光大臣

○後援総顧問　小林与三次読売新聞社社長

○名誉総隊長　橋本龍太郎運輸大臣

○総隊長　史占春CMA主席（責任者）

〃　今西寿雄JAC会長

〃　クマール・カドカ殿下（NMA会長）

○副総隊長　中・日各一名

〃　ハルカ・グルン博士NMA名誉会員

（二）登山隊

中国側＝三ヶ国編成の登山隊　約九十名

ネパール側＝三ヶ国　〃　約九十名

（三）TV・報道隊

中国側に一隊を編成登山隊の指揮下において、独自の責任において報道活動を行なう。ネパール側にも一部編成。

（四）シェルパ、中国登山協力員。

（五）ベースキャンプ要員

以上総員　約二五〇名

◎日本隊の編成

○名誉総隊長　橋本龍太郎

○総隊長　今西寿雄

○副総隊長　一名

○登山隊長　二名（南・北、各一）

○隊員　二十～三十名（南北半数ずつ）

○医療・気象・通信　約十名（南北半数ずつ）
○通　訳　二名（南・北各一）
○TV隊　約三十名
○報道　約九名
なお、隊員数については、十二月四日現在で正確な数は決まっておらず、未定である。

〔報告〕

九州山の集い86――，みやざき

大谷　優

「日本山岳会九州山の集い―86みやざき」は十一月二、三の両日、宮崎県西臼杵郡高千穂町で、今西寿雄会長、大塚博美副会長ら本部役員、特別講師として西堀栄三郎元会長を迎え、宮崎支部など九州関係支部のほか静岡、関西、山陰各支部会員をはじめ、地元の甲斐畝常町長ら、宮崎県内の登山一般愛好者も交えて約百人が参加した。一日目の「講演と映画と交歓の集い」、二日目は秋晴れにも恵まれて第二回宮崎ウェストン祭、大分県にまたがる祖母登山と各ブロックに分かれて支部相互の交流を図る第一回目のこの催しは、和やかなムードに包まれながら有意義、かつ盛会のうちに行なわれた。

一日目の二日は午後二時半から同町県営国民宿舎「高千穂荘」二階広間で開幕。魚本定良宮崎支部長が謝辞とともに開会のことばを述べたあと、今西会長が挨拶され、

「この度は日本山岳会が主催して〈九州山の集い〉を開催したところ、地元町をはじめ宮崎支部にたいへんお世話になりました。また昨年の八十周年記念事業に当たっては、総額二千百五十余万円にのぼる募金などに協力していただき厚くお礼を申しあげたい。

このような催しは二十年ぶりともいえる。現在約四千二百名の会員のうち支部会員が四二％を占めており、その消長が日本山岳会の発展に大きく影響する。今後とも各ブロックにおける支部間の懇親の実をあげてほしい」

と強調された。

次いで西堀栄三郎元会長の「自然を語る」と題する特別講演が行なわれた。淡々とした語り口のな

海外の山

未亡人の涙

山男の友人の結婚披露宴に出たら、山仲間たちがお祝いの言葉の中で何度も同じことを言う。

「これからも新郎をヒマラヤに出してやって下さい」「結婚してヒマラヤに行けなくなったなんてことがないようにどうかよろしく」

お嫁さんも山をやっている人なので、言う方は気楽である。そういう理解にあふれた家庭を是非、ともちろん二人の門出へのはなむけのつもりだ。大勢の前でやんわり「内助の功でヒマラヤへ」とアピールする意味も少しある。

家庭を持つということは、山、とりわけ長時間家を空け危険も大きい海外の山を目指す男、あるいは女にとって前向きの意味ばかりではない。結婚披露宴でこうしたメッセージが贈られること自体、例えばヒマラヤ行きと平和な家庭の両立が難しいことを示唆している。

ヒマルチュリ（七八九三メートル）登頂後、行方を絶った日大隊の中村日出隊員（三一）の場合は「一番生きて帰すべき奴をそうできなかった」と仲間達をくやし涙にくれさせた。妻と三歳と一歳の子を残して念願のヒマラヤに向かった中村隊員の山での話題は、もっぱら家族のことだった。最後まで反対されたヒマルチュリ行を、おそらく自分のためというよりは家族のために「登頂」で締めくくり、疲労と安堵感から下山の一歩を誤ったのだろう。十月二十六日のことである。「結婚したら、まして子供が出来たら、ヒマラヤなどには行かないで」、重い悲しみの時間をのりこえてのちに、妻はそう独身の隊員たちに訴えた。

あまりにも辛いことなので山の世界では、普通、こうした話はごく身近な範囲でしか語られない。そういう人間と一緒になった以上仕方がない、他人の介入出来る問題ではない、という考えもある。しかし、第三者にあからさまに言うかどうかは別にして、家庭持ちが海外の山へ出掛けようとする場合、家族の問題は仕事以上に重いのではなかろうかと思う。

結果的に中村隊員のように、妻子を残して帰らなかったケースは、私の知るだけでもかなりある。偶然のことだが、中村隊員と同じ日に同じ低圧実験室でトレーニングを受けたインド・メルー隊の三人も不運にも帰らなかった。残された家族の悲しみははかりしれない。

交通事故や災害にいつ巻き込まれるかもしれないのがわれわれの日常生活なので、山だけが家族との別れにつながるわけではない。しかし、登山の危険は、本人の意志からまず始まる点が全く違う。精一杯生きようとした結果の死。だから、しばしば「本望だ」とも言われるが、家族たちにはそれは慰めにはならない。

私的な事柄として家族のことを持ち出すのを潔しとしない雰囲気が、山の世界の何処かにあるかもしれない。しかし、それを一番大切と思うならばもっと堂々ととらえていい。先鋭的なクライマーが必ずしも幸せな家庭を持っているとは限らないし（これは外国でも同じだ）、何よりも人には向き、不向きがある。

どんなに良い仲間でも残された家族にしてやれることは、ほとんどないのである。

（江本　嘉伸）

かでユーモアも交え、山の自然に魅せられて虚弱な心身の鍛錬を動機とした登山、あるいは科学者の立場からの大自然観、人生観、南極観測第一次越冬隊長当時の苦労といった体験を通じ、現代にとって探検的、登山的精神の必要性を望まれるなど示唆に富んだ話に参加者一同、強い感銘を受けた。

このあと「チョモランマ（エベレスト）北壁登攀'80」の記録映画を、同隊員であった神崎忠男氏の興趣をそそる解説とともに、深い感動を受けながら観賞した。

引き続き会場を一階ホールに移し、午後五時半から晩餐会が催された。

地元を代表して小田真道宮崎支部理事の歓迎挨拶で始まり、甲斐高千穂町長が歓迎のことばを述べ、大塚博美副会長は本部側として挨拶、そのなかで

「第一回の今回の集会がひじょうに良い雰囲気で開かれてうれしい。ところで、先に中国の提唱で'88年春、チョモランマ（エベレスト）へ、ネパール側の両方から登る計画ができ、ぜひ若い人たちに参加してもらいたい」

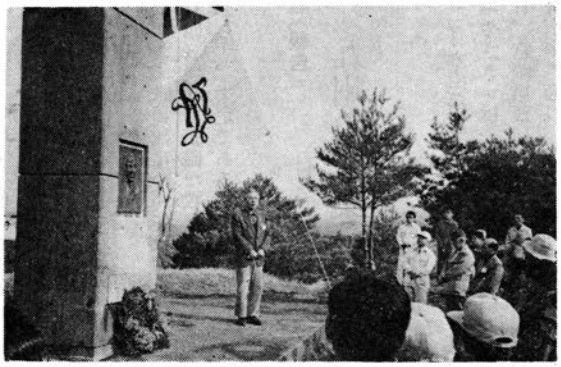
と激励の言葉を贈った。

続いて野口秋人東九州支部長が乾杯の音頭をとり、交歓の宴（うたげ）に入った。高千穂荘をはじめ地元側の好意もあり、ヤマメ、イワナ、しいたけなど山の幸の料理に舌鼓を打ち、カッポ酒や特産焼酎に酒宴たけなわとなる間に、特別出演の井手茂貴宮崎県警音楽隊楽長のトランペット独奏が興を添え、フィナーレは「雪山讃歌」を作詞者の西堀元会長を中心にスクラムを組む、参加者全員の大合唱となり、西沢健一熊本支部長の発声で万歳三唱して交歓の集いを終えた。

このあと高千穂神社境内で舞う、伝統美に輝く夜神楽を観覧、天孫降臨の神話にも彩られる〝日本のふるさと〟の夜を楽しんだ。

× × ×

二日目の三日は「第二回



第二回宮崎ウェストン祭で挨拶する今西会長

近代絵画にみる
日本の山・名作展

本展は、当初本会創立80周年記念行事の一つとして、関係者により企画されたものであるが、昨年は準備期間の不足などにより実現できなかった。その後、朝日新聞社関係者や神奈川県立近代美術館の足立朗氏らの企画推進の努力により、今回開催することができるようになり、朝日新聞社と日本山岳会の主催で、八月二十八日～九月九日まで東京・上野松坂屋で開催された。引続いて、大阪と名古屋でも開催された。

日本の山を描いた近代の日本画と洋画の名作が一堂に展示され、大変見応えのある素晴しい展覧会であった。この展覧会では日本画・洋画共各三十三作家、各作家とも一点づつの作品が並べられたが、日本画では富士山を描いた作品が多かった。出品作品の一覧を参考として紹介する。

日本画

作家名	作品名	制作年
竹内　栖鳳	富士	（一八九七）
横山　大観	比叡山	（一九一七）
川合　玉堂	天地嶽	（一九四五）
結城　素明	山銜夕暉	（一九二七）
今村　紫紅	箱根山・大井川	（一九一二）
安田　靫彦	黎明富士（富嶽）	（一九六七）
川端　龍子	影富士	（一九六〇）
前田　青邨	春富士	（一九七〇）
村上　華岳	二月の頃	（一九一一）
小野　竹喬	比叡	（一九六二）
奥村　土牛	谷川岳	（一九七五）
牛田　雞村	はこねの山	（一九二二）
山口　蓬春	山湖	（一九四七）
小倉　遊亀	晴巒	（一九七六）
池田　遙邨	山の灯	（一九七五）
伊東　深水	富士	（一九三九）
山本　丘人	月夜の噴煙	（一九六二）
小松　均	七嬢富士	（一九七八）
岩橋　英遠	戸隠	（一九七六）
片岡　球子	死火山（妙義山）	（一九六六）
東山　魁夷	夕静寂	（一九七四）
西山　英雄	桜島朝暉	（一九六八）
奥田　元宋	妙義	（一九七三）
高山　辰雄	山響	（一九五六）
吉田　善彦	晩秋尾瀬・三連作	（一九七八）
今野　忠一	男体山	（一九八〇）
堀　文子	神々の座	（一九八二）
横山　操	富士雷鳴	（一九六一）
稗田　一穂	幻想那智	（一九七九）
加山　又造	晨（桜島）	（一九七一）
麻田　鷹司	天地石壁一之倉	（一九七六）
平山　郁夫	飛鳥の群山	（一九七六）
岡　信孝	大和三山	（一九七三）

洋画

作家名	作品名	制作年
高橋　由一	牧ノ原望嶽	（一八七八）
浅井　忠	飛驒高山風景（朝陽）	（一九〇七）
藤島　武二	五剣山の日の出	（一九三二）
和田　英作	三保富士	（一九五三）
坂本繁二郎	暁明の根子嶽	（一九五三）
有馬　生馬	霧島連山遠望	（一九三一）
山本　鼎	秋の白馬岳	（一九三二）
石井　柏亭	雲仙・春	（一九三四）
辻　永	山湖秋日	（一九六八）

宮崎ウェストン祭」が午前九時から高千穂町五ヶ所高原の三秀台（標高八〇〇㍍）で開かれた。宮崎支部が昨夏に発足したのを機会にあらためて始められた。記念碑は四十一年十一月に高千穂町で建設したが、祖母山系を望む高さ八㍍の逆L字型の記念碑にはウェストン師のレリーフの下に、祖母山へ登山した年月日の証明となった地元の矢津田家の日記が刻みこまれている。この日は同祭の開会に先立ち、今年二月に記念碑に下げられた洋鐘を無償で改修、製造した同町鉄工所経営・田尻伝氏に甲斐高千穂町長から感謝状が贈られた。

ウェストン祭は魚本宮崎支部長の開会のことばで幕を開け、厳かに点鐘を聞きながら同師をしのび、山岳遭難者を悼みつつ、登山者の安全を祈って黙祷を捧げた。次いで日の丸とイギリス国旗、日本山岳会旗がひるがえる記念碑に宮崎支部女子会員の手作りによる献花。続いて来賓として今西会長が挨拶されたが、日本登山史はもちろん日本山岳会発足にかかわるウェストン師の重要な役割と足跡に触れ、これを讃えるとともに、あらためて記念碑建設など地元の労を感謝し、今後も同碑を中心に日本山岳会の懇親の実を挙げたいと希望された。

また甲斐高千穂町長も、ウェストン祭の開催を喜ぶとともに、西堀元会長が講演で触れられた「人智を尽くして天命をまつ」という人生観など数々の教訓を行政責任者として学びえたことを吐露し、日本山岳会のいっそうの発展を祈って重ねて礼を述べた。

次いで宮崎支部会員であり高千穂町在住の佐藤光俊さんが、宮崎県山岳界の草分けであった故松本賢郎氏（元県職員）の祖母山系への愛着などを母体とした国定公園指定獲得、この間を通じてウェストン師の祖母登山を確証することになった矢津田家日記の発見といった経緯について話し、今西会長ほか参加者の関心を引いた。このあとエーデルワイスの歌を合唱、全員で祖母山に向かって万歳を三唱して午前十時ごろ閉会した。

同祭後、晩秋の祖母山（標高一七五七㍍）に登山、大塚副会長、神崎氏をはじめ、関西支部の宗實慶子さん、熊本支部の奥野正亥さんほか六人、宮崎支部の日高萬喜男ら男女十八人、計二十八人が参加した。宮崎県一の高さを誇る山頂からは九重、阿蘇、大崩連山を展望できるが、あいにくの薄曇りで九州屈指の景観を逸した。昼過ぎに帰路を急ぐ大塚副会長らを山頂から宮崎支部会員が拍手をもって見送り、温かい交流の余韻を残して別れを惜しんだ。

＜九州山の集い出席者・順不同＞

▽招待者＝甲斐昨常（高千穂町長）、内倉要三（高千穂町収入役）、伊東忠寛（高千穂警察署長）、山田泉（宮崎交通高千穂営業所長）

今西会長，西堀元会長を中心に「雪山讃歌」の大合唱（晩餐会）

▽日本山岳会本部＝西堀栄三郎、今西寿雄、大塚博美、高遠宏、神崎忠男、麥倉啓

▽静岡支部＝山本朋三郎

▽関西支部＝宗實慶子

▽山陰支部＝小西毅、小西淑子

▽福岡支部＝新貝勲、副島勝人、深田泰三

▽熊本支部＝西沢健一、奥野正亥、本田誠也、多田隆峰、田上敏行、和仁古昇、中村誠紀、菊地更生、門脇愛子、中村恵二、川端浩文、河上洋子、鶴田佐知子

▽東九州支部＝野口秋人、三浦敬志、西孝子、窪田祥三郎、江藤幸夫、安井康夫、佐藤清一、古我静、阿南寿範、安東桂三、三浦玲子、安部和代、房前恭子、生野輝雄、手島敦郎、古我亮、児玉美佐子、佐藤浩幸、佐藤俊子、瓜生幹雄、瓜生妙子、首藤すみ代

▽宮崎支部＝小田真道、梯安夫、佐藤光俊、石井久夫、大谷優、伊藤博夫、魚本定良、渋屋博敏、大谷セツ子、岡本真理子、日高萬喜男、日高寿々子、宮下広次、蓑原重夫、魚本亮子、児島実照、池田桂子、谷口治郎、壱岐義弘、壱岐典子、徳留幸子、前原満之、児玉信子、高岩俊昭、服部敬二、大石剛一郎、井手茂貴、松山タエ子、松山正和、梯雪子、大野磯美

（宮崎支部）

日本の山・名作展

斉藤　与里　裏磐梯（一九五三）
山脇　信徳　叡山の雪（一九一五）
小林　和作　秋山（一九六四）
梅原龍三郎　朝暉（一九三八）
安井曾太郎　雨後の霞沢岳（一九三八）
足立源一郎　槍ヶ岳（北鎌尾根にて）（一九六五）
須田国太郎　葛城山（一九四〇―一九六一）
木田金次郎　早春のニセコ（一九六〇）
北川　民次　八幡平（一九五八）
児島善三郎　発哺よりの展望（一九五三）
中川　一政　駒ヶ岳（一九八〇）
中村　研一　八ヶ岳（一九五九）
長谷川三郎　星空の富士（一九三四）
高田　誠　残雪の妙高山麓（一九七〇）
椿　貞雄　雪の妙義山（一九四五）
林　武　赤富士（一九六五）
小山　敬三　浅間山・風（一九六六）
中村　琢二　湯沢のゲレンデ（一九五四）
田崎　広助　久住山（一九五三）
福沢　一郎　奥秩父両神山（一九五五）
野口弥太郎　雲仙（一九五三）
向井　潤吉　山野新雪（一九七九）
田村　一男　比良初雪（一九八一）
杉本　健吉　那智ノ滝雲烟（一九八三）

（高遠　宏）

〔報告〕

越後支部結成四十周年記念晩餐会と貉が森山

昭和二十一年に発足した越後支部が、結成四十周年を迎えたということで、十月十八日、十九日の両日、祝賀晩餐会と記念山行を開催した。

初日の晩餐会場は阿賀野川の清流を見渡す、鹿瀬町麒麟山温泉の松仙閣で、東京、大阪、京都など県外からの岳人等の参加を含め七十有余名の出席となり、温泉を楽しみ、丹前姿でも結構と、気楽に寛ろいだ祝宴になった。

佐藤支部長の挨拶、本部からの来賓として岡沢祐吉理事の祝辞があり、支部名誉会員で設立発起人でもある笠原藤七氏が所感を述べたあと、支部永年会員（三十年以上在籍）の表彰や、高齢会員（七十歳以上）に祝品が贈呈され、祝電披露、金山淳二大先輩の音頭で明日の晴天と益々支部の団結と融和を祈念しての乾杯で和やかな宴会に移った。

また二十年ぶりに刊行した支部の機関誌※「越後山岳」第七号が披露され、予約者に手渡された。

宴席は久し振りに顔を合わせた会員、遠来からの賓客の歓談で大広間も熱気に溢れ、時間を忘れて盛り上った、また別室ではビデオで越後の山やヒメサユリ等の映写もあり、また部屋ごとに始った二次会を巡り歩く人たちで全館貸し切りの宿が賑わった。

参加者が宿の収容定員を超えたため、隣りの旅館へ十数名が分宿となり、設営係は応対に懸命なさわぎであった。

翌日、秋しぐれは止んだとは云っても好天とは言い難かったが、記念写真を玄関前で撮った後、マイクロバスや自家用車を連ねた五十余名が、新潟と福島の県境に聳える貉が森山（一三一五㍍）へ向った。

室谷川を通り、山腹を縫う峰越林道は紅葉に彩られ車窓から眺める渓谷や撫林の秋色が眼を楽しませたが、シーズンとあって茸採りのマイカーも多かった。

車道を離れて登りにかかると山は冬景色に変り、新雪を被った潅木薮を分け、積雪を踏む登行が皆を喜ばせた。一等三角点の狭い頂上は華やかな色彩の集団で溢れ「越乃寒梅」の飲み廻しで登頂を祝ったが、生憎の霧に小雪も舞って眺望は皆無、晴れてくれれば飯豊連峰はじめ会津や越後の山波の景観で遠来の、また久々に訪れた会員諸公に餞けができたのにと誠に残念であった。それでも天然の

自然保護

林野行政は見直しの時期に

――祖母・傾山麓で自然保護全国集会――

関塚貞亨

日本山岳会の自然保護全国集会も十二回目を迎え、今年は東九州支部の全面的協力を得て十一月一日から三日まで、別府および祖母、傾山麓の宇目町で開かれた。

「大分県と宮崎県の境にある祖母、傾山の原生林が皆伐されて、無惨なことになっている」という報告もあって、二年前にも林野庁に伐採中止を要請しているが、今年の自然保護全国集会の主要議題は「森林伐採と植林」を討議することになって、会員だけでなく、二日目は地元自然保護関係者、地元住民との懇談も計画された。

祖母、傾山一帯は江戸時代から紅葉の名所として知られている所だが、現地視察と地元の人たちと懇談を通じて、残り少ない日本の原生林保護の道を探ろう、という狙いもあった。

祖母、傾の原生林は殆どが国有林で、祖母山などにはまだ僅かに広葉樹林が残っているが、傾山の周辺は皆伐の状況はひどい。縦横に林道がはしり、路肩の垂直の露岩は殆どモルタルで押えられている。斜面は稜線から両側三百メートルは木を残すのが地滑り防止のうえから林業の常識ということだが、僅かに稜線の一列を残すだけで急斜面は植林も出来ず、いたる所で土壌流出と地滑りがおき、岩石が露出している。

不幸なことに、皆伐された大分側は急斜面が多く、被害も土壌流出も激しい。ブナ、カエデなどの原生林が、水源涵養林の役目を果たしてきたが、豊かな水量を誇っていた水場も僅かにチョロチョロと流れているに過ぎない。伐採したカエデやブナの代わりに植えた杉は間伐もされず枝打ちもしていないから経済的価値は殆どない。紅葉の名所も、これら不様な杉林が景観をぶち壊している。

自然保護というと、都会人の道楽とでも考える地元も多いが、祖母、傾の周辺の人達は違う。僅かに残された原生林を保護するための討議、質問や助言を求めて、二日目の宇目町木浦小学校での会議は数時間におよんだ。

地元の人はいう。役所は非難をおそれて直接手を下さず、国有林を外郭の民間造林会社に払い下げて皆伐をやらせている。民有林なら子孫のことを考えて、こんな無責任な伐採はしない。二十年、三十年後の経済的価値を思って杉林の手入れは十分にする筈だ。

林野行政は独立採算制だ。しかも予算は単年度制となると、将来の杉林の手入れに予算を使っていたのでは赤字が増えるばかりである。手っとり早く原生林を伐採すれば、中には一本百万円以上するケヤキや赤松の銘木もある、というわけだ。しかも署長などのエリートは本庁に顔が向いている人が多いのも事実だ。ともすれば目先の成績をあげることばかり考え、地元の人の迷惑に目が届かないことになり易い。

現在、林野行政が「抱えている職員と、国有林で働いている人たちを失業させるわけにはいかない」という理由で何時までも貴重な森林資源を伐採し続けるのは後世に過恨を残すことになろう。

狭い国土では林業は円高もあって国際競争力がなくなった。国有林で働く人たちには同情するが、国鉄、石炭などと同じように合理化による対策は政治の問題として考える時期にきている。もはや林野行政も独立採算制をとることに無理がでている。早急に見直しが必要なようだ。杉や檜などの針葉樹は、保水力が少なく、水源涵養林としても崖崩れ防止の保安林としても適していない。

ナメコやブナハリタケを見つけてポリ袋を振らませたり、下山の車中では真白な飯豊の雪稜や御神楽岳、日尊倉山が姿を見せてくれて一同を喜ばせた。

帰途は寄り道をして上川村の御神楽温泉で湯に浸り、折りから村で催していた、山の幸の即売会でお土産をザックに詰め込んだり素朴な民芸品などなどを買い求めた。

フィナーレは松仙閣の玄関前で実行委員心尽しの熱いナメコ汁とコップ酒を堪能して、記念行事は盛大な拍手のうちに終った。

越後支部の行事といえば、いつも野暮なローカル調で、行き届かぬことばかりと恐縮しているが、若い会員は接待に目を廻しながらも、同好の先輩たちの言動に新鮮な感銘を受けて嬉しそうであった。

参加された皆々様には本当にありがとうと、主催者側として深甚の謝意を表するとともに、記念にお贈りした、当支部マーク入りのネクタイピンやスカーフ止めを、大切な想い出の品としてご愛用していただきたいと願っている。

越後支部名誉会員笠原藤七氏の挨拶

参加者（申込順） 赤松光、井口正男、斉藤平七、小早川又一、金山淳二、望月力、大山昭一、中村一雄、上野寿一、上野栄子、早川英夫、早津邦俊、五十嵐篤雄、笠原藤七、佐久間惇一、岩下光男、岩下香代子、大江勝広、田中純夫、土田幸雄、山田智子、太田邦介、山田勲、上村幹雄、桑原悌治、江田宗友、高田眞哉、牧野牧夫、平松勝司、坂井厚、柳沢一男、奥津五郎、大塚玲子、佐藤一栄、山田一介、佐藤徳松、矢尾板二郎、矢尾板奈々子、山崎豊、入谷浩右、小林由美子、高橋庄一、本望英紀、井出秀雄、込山孝、谷中隆明、荒井辰弥、岩堀瑞子、坂井久光、荒木吉栄、斉藤弘、渡辺義貴、生田目佳代子、久保孝一郎、菅野弘章、田仁代、茅原一也、栗原昭作、広羽清、遁所彊二、古沢康令、川上光久、山崎幸和、室賀輝男、酒井春一、倉島正吉、藤井与嗣明、鈴木敏雄、富沢磐、岡沢祐吉、桐生恒治、矢田目昇、佐藤弘、本間一人、

（斉藤平七）

※『越後山岳』第七号は昭和六十一年十月十八日発行、A5版、三七八頁、定価二千五百円、送料三百円。講入申込先は〒951新潟市営所通一番町学生書房方 日本山岳会越後支部宛です。

＊　＊

猪俣君のこと

小倉　厚

会員番号7411、猪俣信市君がまだ四〇代の若さでこの世を去った。

今からみると彼はまさに太く短かい人生だったと思う。とにかく信念と実行力、強力な個性の持主であった。自然保護にかける情熱は火の玉を思わせた。

日本山岳会・自然保護委員会の議事録に次のように記され、彼の死が報じられた。

訃報

自然保護

「日本中の残り少ない原生林は、国民の共有財産として二十一世紀の人々に残すことが、現代に生きるわれわれの義務である」ということを、今回の全国集会を通じて痛感した。

出席者（東京）国見利夫　中村純二　中村あや　斉藤かつら　近藤　緑　澤井政信　梨羽時春　麦倉　啓　関塚貞亨（東九州支部）野口秋人　梅木秀徳　山本信治　窪田祥三郎　姫野和記　加藤英彦　阿南寿範　西　孝子　安井康夫　大力　博　山本康文　三浦敬志　古我　静　首藤宏史　三浦玲子　大平展義　安東桂三　江藤幸夫　大林正彦　松尾健　南崎大海　荒金道子（宮崎支部）魚本定良（山陰支部）小西　毅　小西淑子（特別参加）針宮登氏ほか地元自然保護団体、宇目町民約三十人

自然保護

J・A・C越後支部で自然保護委員としてまた新潟県山のゴミ会議を結成、精力的に自然保護運動に活躍されていた猪俣信市氏が病気のため八月二十二日午後二時三十三分逝去されました。ここに生前の御遺徳をしのび御冥福を祈りたいと思います。

私が猪俣君を知ったのは、昭和五十一年六月、J・A・C越後支部創立三十周年記念式典が越後湯沢で開催された席上であった。そして『新潟県山のゴミ会議』という特異な名前で、かつ実践的な強力な自然保護団体があることも併せて知った。そのゴミ会議の代表こそこの猪俣信市君であったわけだ。

日本山岳会の自然保護委員の末席をけがしていた私としては、当時、日本の山がゴミによって汚染されているのに頭を痛めている最中だったので、早速その年の秋に行なわれた苗場山の清掃登山に参加してみた。そして彼と、彼のひきいるゴミ会議の面々たちのいかなる小さなゴミでも逃すまいとする真しなボランテア活動に心をうたれ、私もゴミ会議に入会した。ひとえに彼の人柄にほれ込んだといってよいだろう。それから彼と親しい交友が続くことになった。

かくして私は続いてヘリコプターまで動員して行なわれた巻機山、白馬岳（小蓮華岳）そしてゴミ会議の分派ともいうべき国立ガンセンター山岳部の雲取山清掃にと参加し、ますます、まさに彼を中心としたゴミ会議の動員力と実戦的な活動に感服した。新潟県の山々はこのゴミ会議のゆくところ見るみるうちにきれいになっていった。一方、ゴミの持ち帰り運動も徹底して行なわれ、この種の運動の先べんをつけたといっても過言ではない。

かくして動員された人員は延四〇〇〇人、処理したゴミは一〇〇トンを越えたという。

彼はいつもその中心だった。怒れば鬼神も避けるほどの強力さ、笑えば子供も笑う童顔となってユーモアをとばす、まことに魅力的な大人物であった。酒も強かった。清掃登山の帰りにはよく共に飲んだし、同郷のよしみから請わ

れるままに本部との連絡や会長のメッセージなども運んだこともあった。

このような彼の獅子奮迅の活躍で新潟県の山々は見違えるほどきれいになった。そしてもはや彼が再び大動員をかけてまで清掃する必要がないほどまでになったのが、ゴミ会議発足以来十年。まことに喜ばしいことであった。

彼とゴミ会議の果した偉大な業績の足どりを、ここに書き記すにはいかにも紙幅が足りない。どうか同会議が発行した『山は甦る』（山岳美化10年の軌跡）を読んで欲しい。

彼はこの本を私に送るにあたり「日本ではもう二度とできない本」といった。いかにも自信に満ちた言葉であった。

頑健にしてまさに叩いても死にそうもなかった彼が病気になったと伝え聞いた時は、遠くに住む私にとっては晴天の霹靂に等しかった。しかも、そのあと、日本山岳会の年次晩餐会にもこの『山は甦る』を持って現れたので、少しやせてはいたがひと安心したものだった。その後、しかし、天は非情なものであった。再び病状が悪化したのであろう、遂に帰らぬ人となってしまった。

一代の風雲児にも等しい、自然保護にとっては誠に惜しい人が逝ったものだと思う。心から冥福を祈るものである。

自然保護の標語について

自然保護委員会

本誌四八五号（昭和六十年十一月）にて募集いたしました「自然保護に関する標語」につきましては、応募者六名、応募件数は四十三でありました。いずれ劣らぬ優秀作品揃いでありましたが、当委員会内で慎重審査の結果、次の標語の採用が決定いたしました。

・きれいな雪山よごすまい、持って帰ろう捨てたゴミ
・白銀は招くゴミ持ち帰るクライマーを
・白銀は嘆くゴミ捨てて行くクライマーを
・21世紀まで残そう美しい山と渓
・子孫に残そう美しい山と渓
・次代に残そう美しい山と渓
・残そう緑、美しい日本の山
・緑あるところ憩あり。憩あるところに生命がある。
・緑を守ろう　緑は生命の泉である。
・緑を守ろう　緑は地球の泉である。
・美しいみどりの自然を後世に!!
・ゴミの無いきれいな山をいつまでも
・今日もまたゴミを背負って帰ります
・原生林、緑の価値を見なおそう
・登る山、みんなで守る貴重な自然
・折らない　採らない　汚さない

なお、応募者の氏名は次の通りです。（敬称略・順不同）

杉田博　関塚貞亨　麦倉啓　横山隆　望月計市　渡辺正臣

これらの入選作品は本誌『山』で、順次、交替しながら掲載し、自然保護の啓蒙に役だたせていただくつもりです。

ここにご協力をいただきました各位に厚くお礼を申し上げる次第です。

山陰支部だより

十一月三日、支部恒例の秋季登山会が大山で行なわれました。支部会員十名、一般参加者二十三名が大山縦走コース、三鈷峰コース、烏ケ山コースに分かれて登山し、紅葉の大山を満喫しました。

大山は例年より早く十月十五日に初冠雪となったため、紅葉の色合はいまひとつでした。尾根筋はガスがかかり、全山真赤の大展望とまではいきませんでしたが、真赤なダイセンキャラボクの実や、倒木のキノコなど、自然の幸をすこしいただいたり、落葉の絨緞のブナ林の散策を楽しみました。

追悼

木原均先生の憶いで

中尾佐助

木原先生は七月二十七日、九十二歳の高齢で死去された。考えてみれば、私は先生の傘の下にあったようなものだった。

昭和十四年、私が京都大学農学部に入学する時、面接で初めて先生にお目にかかった。それまでは私は木原先生のお名前は承知していなかった。入学後講義を受け、先生の細胞遺伝学のゲノム説に魅了され、専攻は木原先生について、学問をはじめたのだった。

木原先生は私にとって学問の先生だけでなく、登山、探検の大指導者であった。京都大学には強力な登山探検グループがあって、白頭山遠征をはじめとして、大活動をつづけ今に到っている。今は京都大学学士山岳会の名でよく知られているが、それは始めから木原先生の指導下にあったのである。また木原先生は探検家としては、昭和十三年の内蒙古生物学探検のリーダーとなった。昭和三十年には京都大学カラコラム・ヒンズークシ探検隊の総隊長としてパキスタン、アフガニスタン、イランを探検した。この探検は日本のカラコラム登山への幕を切っておとしたものであったが、先生自身としては、タルホコムギを現地で観察・採集して、パンコムギの起原論を完成できた。

先生はまた北大の学生時代には野球、テニス、スキーなどのスポーツにはげみ、万能スポーツマンぶりを発揮され、その学問研究もスポーツマンシップの頑張りそのものであった。日本山岳会とは槙有恒さんをはじめ、有力会員の方々と親交を持ち、またスキー連盟の会長もされている。冬期オリンピックには日本選手団長もしている。

木原先生と日本登山界との関係は、主に京大関係の登山家を通じ、非常に広く、深くひろがっている。特にヒマラヤなどの海外遠征登山ではその影響が大きい。木原先生は日本登山界の大先達であった。

これより先、二日夜にはSOB山荘で支部の十一月例会を行ない、三年後に迎える支部設立四十周年記念事業の計画や、十二月の支部晩餐会の話に遅くまで花が咲きました。

（井上豊重）

会務報告

十月理事会

10月7日午後6時30分

場所　本会ルーム

出席者　今西会長、大塚副会長、鴫原、橋本、松永、大橋、浜口、梅野、高遠、鈴木、大森、岡沢、太田各理事、松田、中村、宮下各評議員

委任　山田副会長、新井、平井、絹川、関塚各理事

審議事項

○明治大学カラコラム（ブロードピーク）登山隊一九八七　推薦状交付について　承認

報告事項

○三国合同登山の件

カトマンズに三国関係者が集まり準備会議を開催、登山隊の名称「中国・日本・ネパール一九八八年サガルマタ／チョモランマ峰友好登山隊」とすることになり、リーダーシップ、登山隊の規模等について検討された。

○年次晩餐会について

十二月六日私学会館富士の間

○委員会報告

山研は十月二十五日閉所する。会報をもう少し早く会員に届くよう検討中。

高所登山委員会委員長が川上隆氏となる。

ルーム日誌

10月

1日　集会委員会（映写会）
4日　マナスルトレッキング説明会
7日　理事会
8日　海外委員会・山研委員会
15日　三水会
16日　フィルム委員会
20日　総務委員会・自然保護委員会
21日　婦人懇談会
22日　集会委員会・博物館資料
25日　図書交換会
27日　常務理事会
28日　婦人懇談会・自然保護委員会
29日　三国登山打合わせ
31日　科学委員会
10月ルーム来室者　370名

会員異動

物故

1507　早川義郎　（10・17）

海外在住休会

7910　丸尾祐治　ネパールへ

支部変更

7575　平井和雄　山梨支部へ

図書受入報告1

図書委員会

昭和 61 年2月分受入図書（つづき）

38. 佐藤京子著「ヒマラヤ 7403 メートル」あかね書房　1969（購入）
39. 金子民雄著「中央アジア探検小史」三省堂　1978（購入）
40. 小林房太郎著「南極と北極」加山堂書店　明治 43（購入）
41. 浅井東一著「登山家に必要な救急処置」朋文堂　昭和 14（購入）
42. ベルトラム著「北極圏と南極圏」明文堂　昭和 17（購入）
43. ロアルト・アムンゼン著「アムンゼン探検誌」朋文堂　昭和 17（購入）
44. 今西錦司著「私の自然観」筑摩書房　1966（購入）
45. 今西錦司著「自然と進化」筑摩書房　1978（購入）
46. ガストン・レビュファ著「天と地の間に」新潮社　昭和 38（購入）
47. ガストン・レビュファ著「雪と岩」新潮社　昭和 36（購入）
48. 全日本山岳連盟東海地区山岳連盟「全日本ヒマラヤ登山隊報告書」東海地区山岳連盟ヒマラヤ委員会　昭和 39（購入）
49. トニー・ヒーベラー著「冬のアイガー北壁初登攀」ベースボールマガジン社　昭和 39（購入）
50. ピーター・ギルマン　ドゥガール・ハストン共著「アイガー直登」ベースボールマガジン社　昭和 39（購入）
51. マックス・アイゼリン著「ダウラギリ登頂」ベースボールマガジン社　昭和 38（購入）
52. 岡本文夫他著「チャムラン，ヒマラヤの詩と真実」ベースボールマガジン社　昭和 40（購入）
53. グヤン・シン著「エヴェレストの魅惑」ベースボールマガジン社　昭和 39（購入）
54. ゲルハルト・レンザー著「プモ・リ」ベースボールマガジン社　昭和 40（購入）
55. ウィルフリッド・ノリス著「未知の山へ」ベースボールマガジン社　昭和 38（購入）
56. サー・エドモンド・ヒラリー著「霞の中の九ケ月」ベースボールマガジン社　昭和 40（購入）
57. 水野公男著「全国一等三角点 968 点の所在地一覧」著者　昭和 50（購入）
58. 高瀬重雄著「立山信仰の歴史と文化」名著出版　昭和 56（購入）
59. 北大山の会「日高山脈」茗渓堂　1977（購入）
60. 石岡繁雄著「屏風岩登攀記」碩学書房　昭和 52（購入）
61. シーフ・イザード「雪男探検記」ベースボールマガジン社　昭和 32（購入）
62. 松本龍雄著「初登攀行」あかね書房　1966（購入）
63. ジョン・ミューア著「アラスカ探検記」聖紀書房　昭和 17（購入）
64. 西岡一雄他著「登山技術と用具」山と渓谷社　昭和 35（購入）
65. A.A. マレイノフ著「最新登山技術」ベースボールマガジン社　昭和 24（購入）
66. 関田美智子著「蒼昊に翔る，マッキンレー南壁西稜登山及び遭難報告」凌雪会　1972（購入）
67. 東郷文彦著「ヒマラヤの王国ブータン」鹿島研究所出版会　昭和 40（購入）
68. 河口慧海著「チベット旅行記」旺文社　昭和 53
69. 今西錦司著「山と探検」岡書院　昭和 25（購入）
70. 松方三郎著「アルプスと人」岡書院　昭和 25（購入）
71. 谷口正彦著「まぼろしの雪男」角川書店　昭和 49（購入）
72. 田部重治著「峠と高原」角川書店　昭和 33（購入）
73. 桑原武夫著「登山の文化史」新潮社　昭和 31（購入）
74. 栗林一路著「アラスカの山に挑む」雪華社　昭和 42（購入）
75. 明治大学体育会山岳部　千葉大学山岳部「追悼　白馬鑓ケ岳遭難報告」明治大学体育会山岳部　千葉大学山岳部　昭和33（購入）
76. 日本山書の会「山書研究　創刊号」日本山書の会　1963（購入）
77. 日本山書の会「山書研究　第3号」日本山書の会　昭和 39（購入）
78. 日本山書の会「山書月報 No. 2-33」日本山書の会　昭和 39

図書受入報告 2

図書委員会

昭和 61 年 2 月分受入図書（前ページよりつづき）

（購入）

昭和 61 年 3 月分受入図書

1. 美坂哲男著「山のいで湯 日本百名湯(上)」山と渓谷社 1986（版元寄贈）
2. 美坂哲男著「山のいで湯 日本百名湯(下)」山と渓谷社 1986（版元寄贈）
3. 小宮昌平・近藤和美編「山 生きる・学ぶ・探る」大月書店 1986（版元寄贈）
4. 長尾三郎著「マッキンリーに死す」講談社 昭和 61（版元寄贈）
5. 日本山岳会カンチェンジュンガ登山隊「カンチェンジュンガ周辺図」茗渓堂 1986（版元寄贈）
6. 西尾寿一編「渓谷 第 10 号」京都山の会出版局 1986（版元寄贈）
7. 吉阪隆正著「吉阪隆正集第 14 巻 山岳・雪氷・建築」勁草書房 1986（版元寄贈）
8. 高寺志郎著「日本の名峰 4 八甲田・八幡平・早池峰」山と渓谷社 1986（版元寄贈）
9. 日本聖公会横浜聖アンデレ教会「『主の御名によりて』横浜聖アンデレ教会百年史」日本聖公会横浜聖アンデレ教会 昭和 60（垣内茂氏寄贈）
10. 栃木県高等学校体育連盟登山部インド・ヒマラヤ実行委員会「インド・ヒマラヤを攀じる CB 31 峰全員登頂の記録」栃木県高等学校体育連盟登山部インド・ヒマラヤ実行委員会 1984（編者寄贈）
11. 黒部の衆「黒部別山」黒部の衆 1986（加藤伊介氏寄贈）
12. 藤島玄編著「越後山岳 創刊号」日本山岳会越後支部 昭和 23（笠原藤七氏寄贈）
13. 藤島玄編著「越後山岳 第貳号」日本山岳会越後支部 昭和 23（笠原藤七氏寄贈）
14. 藤島玄編著「越後山岳 第参号」日本山岳会後越支部 昭和 24（笠原藤七氏寄贈）
15. 日本山岳会越後支部編「越後山岳 第四号」日本山岳会越後支部 昭和 30（笠原藤七氏寄贈）
16. 冬山雷鳥生態研究会「冬山ライチョウ生息調査報告書（昭和 53～58）富山県 昭和 60（発行者寄贈）
17. 冬山雷鳥生態研究会「冬山ライチョウ生息調査報告書（昭和 59 年度）」富山県 昭和 60（発行者寄贈）

輝く時代の、熱き記録。

世界の主な高峰が次々に登頂された栄光の時代、そのすべてを語り継ぐ「マウンテン・ワールド」。来年一月、いよいよ刊行です。詳細な記録、貴重な写真の数々。「幻の名書」の復活に、どうぞご期待ください。

第Ⅰ期／予約受付中！

8巻～14巻（1953～1963）全7巻 昭和62年1月刊行予定

〈第Ⅰ期7冊セット価格〉現金価格（定価）175,000円　分割払価格 182,000円

●支払期間10か月・支払回数10回●実質年率8.8%（均等払の場合）※分冊売りはご容赦ください。

B5判（257ミリ×182ミリ）／平均頁310頁／平均写真頁64頁

日本語版監修委員：近藤 等（早稲田大学教授）

福田宏年（中央大学教授）望月達夫（日本山岳会名誉会員）

薬師義美（京都大谷高校教諭）吉沢一郎（前日本山岳会副会長）

翻訳：田村協子／佐藤テル／山本健一郎／倉知 敬／新島義昭／吉永定雄ほか

第Ⅱ期

15巻～17巻（1964～1969）別巻●ヒマラヤ編年誌Ⅰ／ヒマラヤ編年誌Ⅱ 全5巻／昭和62年秋刊行予定

第Ⅲ期

1巻～7巻（1946～1952）全7巻／昭和63年秋刊行予定

栄光の時代を語り継ぐ幻の名書 遂に邦訳。

スイス山岳研究財団編

MOUNTAIN WORLD

マウンテン・ワールド

総19巻（本巻17巻・別巻2巻）

小学館

第Ⅰ期7冊セットご予約の方に、もれなく大森弘一郎撮影エヴェレスト(サガルマタ)遠望」のオリジナルプリント(169ミリ×414ミリ)を差し上げます。

詳しい資料を差し上げます。〒101 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館宣伝部「マウンテン・ワールド」係までおハガキで。

☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

◉集会山行のお知らせ

①スキー集会

今年は中央大学の小屋をお借りして、「八方のスキー場で、スキーを楽しもう」という計画をたてました。是非ご参加下さい。

期日 昭和六十二年一月十七～十八日（一泊二日）

費用 七千円（食事、お酒代）

定員 三十五名

申込方法 十二月十七日まで事務局へ

②庚申山（一九〇一メートル）

期日・日程 昭和六十二年二月一日（日）

銀山平七時集合（足尾線通洞駅よりタクシー）

歩行タイム六～八時間

厳冬期の山、岩壁の間をフッセルして山頂に立つ。積雪一メートル。銀山平の国民宿舎「かじか荘」か、駅周辺に前夜泊の必要。

申込方法 十二月二十五日まで事務局へ

③鹿岳（一〇一五メートル）

期日・日程 昭和六十二年三月二十九日（日）

下仁田駅九時三十分集合。

歩行タイム五時間

二つの岩峰からなる西上州の代表ともいえる山。三月は、ヤブもうるさくない。

申込方法 二月二十八日まで事務局へ

※以上、参加希望の連絡をいただいた方には案内状をお送りいたします。是非ご参加下さい。

集会委員会

＊

◉「大気の発光現象」講演会

日時・場所 昭和六十二年一月二十三日（金）午後七時より山岳会ルーム

講師 中村純二委員

山道を歩いていると、ブロッケン現象に出会ったり、幻の太陽にまどわされることもあり、また雷光やヒトダマに脅かされることもある。これら様々の発光現象をスライドを使って説明する。蜃気楼・不知火・セントエルモの火・真珠雲・大火球・オーロラ等にも触れる予定である。

会員諸兄姉が遭遇された現象があれば、それらについても討議を期待している。

科学研究委員会

＊

◉図書委員会の催し二つ

①第23回「この一本展」および「山岳図書を語る夕べ」開催

日時 二月十四日（土）午後二時

場所 ルーム・集会室、図書室

今回の「この一本展」は、故山崎安治氏所蔵の貴重な和綴じ本を展示いたします。

また、併催の「山岳図書を語る夕べ」は、『山崎安治氏と日本登山史』というテーマで、近藤信行氏に語っていただきます。ご期待下さい。

②第14回山岳史懇談会

日時 三月（日時未定）

場所 ルーム・集会室

講師 谷口現吉氏、金山淳二氏ほか。

昭和七、八年頃の慶応山岳部の活動を中心に、当時部員であった講師の方々に語っていただきます。

図書委員会

昭和六十一年十二月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四 サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 今西寿雄
編集代表 岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座 東京三―四八二九番
東京都港区六本木三ノ一ノ三〇 ABビル
印刷所 株式会社 技報堂